

海亀

岡本綺堂

青空文庫

「かぞえると三十年以上の昔になる。僕がまだ学生服を着て、東京の学校にかよっていた頃だから……。それは明治三十何年の八月、君たちがまだ生まれない前のことだ。」

鬢鬚のやや白くなつた実業家の浅岡氏は、二、三人の若い会社員を前にして、秋雨のふる宵にこんな話をはじめた。

そのころ、僕は妹の美智子と一緒に、本郷の親戚の家うちに寄留して、僕はMの学校、妹はA女学校にかよっていた。僕は二十二、妹は十八——断つて置くが、その時代の若い者は今の人たちよりも、よつぽど優ませていたよ。

七月の夏休みになつて、妹の美智子は郷里へ帰省する。僕の郷里は山陰道で、日本海に面しているHという小都会だ。僕は毎年おなじ郷里へ帰るのもおもしろくないので、親しい友人と二人づれで日光の中禅寺湖畔でひと夏を送ることにした。美智子は僕よりもひと足さきに、忘れもしない七月の十二日に東京を出発したので、僕は新橋駅まで送つて行つ

てやった。

言うまでもなく、その日は盆の十二日だから草市くさいちの晩だ。銀座通りの西側にも草市の店がならんでいた。僕は美智子の草包かばんをさげ、妹は小さいバスケットを持って、その草市の混雑のあいだを抜けて行くと、美智子は僕をみかえって言った。

「ねえ、兄にいさん。こんな人込みの賑やかな中でも、盆燈籠はなんだか寂しいもんですね。」
「そうだなあ。」と僕は軽く答えた。

あとになってみると、そんなことでも一種の予覚というような事が考えられる。美智子はやがて盆燈籠を供えられる人になってしまつて、彼女と僕とは永久の別れを告げる事になつたのだ。

妹が出発してから一週間ほどの後に、僕も友人と共に日光の山へ登つて——最初は涼しいところで勉強するなど大いに意気込んでいたのだが、実際はあまり勉強もしなかつた。湖水で泳いだり、戦場ヶ原のあたりまで散歩に行つたりして、文字通りにぶらぶらしていると、妹が帰郷してから一カ月あまりの後、八月十九日の夜に、僕は本郷の親戚から電報を受取つた。帰省きせいちゆうの美智子が死んだから直ぐに帰れというのだ。僕もおどろいた。

なにしろそのままには捨て置かれなと思つたので、僕は友人を残して翌日の早朝に山

をおりた。東京へ帰って聞きただすと、本郷の親戚でも単に死亡の電報を受取っただけで詳しいことは判らないが、おそらく急病であろうというのだ。誰でもそう思うのほかはない。残暑の最中であるから、コレラというほどではなくても、急性の胃腸加答児かたるのような病気に襲われたのでないかという噂もあった。ともかくも僕はすぐに帰郷することにして東京を出発した。ひと月前に妹を新橋駅に送った兄が、ひと月後にはその死を弔らうべく同じ汽車に乗るのだ。草市のこと、盆燈籠のこと、それらが今さら思い出されて、僕も感傷的の人とならざるを得なかった。

帰郷の途中はただ暑かったというだけで、別に話すほどのこともなかったが、その途中で僕が考えたのは「清きよしがさぞおどろいて失望しているだろう。」ということだ。僕の実家は海産物の問屋で、まず相当に暮らしている。そのとなりの浜崎という家うちもやはり同商売で、これもまあ相当に店を張っている。浜崎と僕の家とは親戚関係になっていて、浜崎の息子と僕たちとは従弟いしこ同士になっているのだ。

浜崎のひとり息子の清というのは大阪の或る学校を卒業して、今は自分の家の商売をしている。清と美智子とは従弟同士の許いいなすけ婚けといったようなわけで、美智子がAの女学校を卒業すると、浜崎の家へ嫁入りする筈になっているのは、すべての人が承認しているの

だ。今度も新橋でわかれる時に、「清君によろしく。」と言ったら、美智子は少し紅い顔をしていた。美智子は帰郷して清に逢つたに相違ない。となり同士だからきつと逢つてゐるに決まつている。その美智子が突然に死んだのだから、清はどんなに驚いているか、どんなに悲しんでいるか、それを思うと僕の頭はいよいよ暗くなつた。

もちろん葬式の間には合わないのは僕も覚悟していたが、殊に暑い時季であつたために、葬式はもうおとといの夕方に執行されたということを、僕は実家のしきい 鬮をまたぐと直ぐに聞いた。

「じゃあ、早く墓参りに行つて来ましょう。」

「ああ、そうしておくれ。美智子も待つてゐるだろう。」と、母は眼をうるませて言った。旅装のまま——といつたところで、しろがすり 白飛白のひとえもの 単衣に小倉の袴をはいただけの僕は、麦わら帽に夕日をよけながら、ぼだいじ 菩提寺へいそいで行つた。地方のことだから、寺は近い。それでも町から三町あまりも引つ込んだところで、桐の大木の多い寺だ。寺の門をくぐつて、先祖代々の墓地へゆきかかると、その桐の木にひぐらしがさびしく鳴いていた。見ると、妹の墓地の前——新ぼとけをまつるそとば 卒塔婆や、しらはり 白張提灯や、しきみ 櫛や、それらが型のごとくに供えられている前に、ひとりの男がうつむいておが 拝んでいた。そのうしろ姿を

みて、僕はすぐに覺つた。彼はとなりの息子の清に相違ない。顔を合せたらまず何と言つたものか、そんなことを考えながらしずかに歩みよると、彼は人の近寄るのを知らないように暫く合掌していた。それを妨げるに忍びないので、僕は黙つて立つていた。

やがて彼は力なげに立上がつて、はじめて僕と顔を見合せると、なんにも言わずに僕の両腕をつかんだ。そうして、子供のように泣きだした。清は僕よりも年上の二十四だ。大の男がその泣き顔は何事だと言いたいところだが、この場合、僕もむやみに悲しくなつて、二人は無言でしばらく泣いていた。いや、お話にならない始末だ。

それから僕は墓前に参拝して、まだ名残り惜しそうに立っている清をうながすようにして、寺を出た。そこで僕は初めて口を開いた。

「どうも突然でおどろいたよ。」

「君もおどろいたろう。」と、清は俄かに昂奮するように言った。「話を聞いただけでもおどろくに相違ない。いや、誰だつておどろく……。ましてそれを目撃した僕は……。僕は……。」

「目撃した……。君は妹の臨終に立会つてくれたのかね。」

「君は美智子さんが、どうして死んだのか……。それをまだ知らないのか。」

「実はいま着いたばかりで、まだなんにも知らないのだ。」と、僕は言った。「いつたい、妹はどうして死んだのだ。」

「君はなんにも知らない……。」と、彼はちよつと不思議そうな顔をしたが、やがて又、投げ出すように言った。「いや、知らない方がいいかも知れない。」

「じゃあ、美智子は普通の病氣じゃあなかつたのか。」

「勿論だ。普通の病氣なら、僕はどんな方法をめぐらしても、きつと全快させて見せる。君の家だつて出来るかぎりの手段を講じたに相違ない。しかも相手は怪物だ、海の怪物だ。それが突然に襲つて来たのだから、どうにも仕様がな^い。」と、彼は拳^{こぶし}を握りしめながら罵るように叫んだ。

「君、まあ落ちついて話してくれたまえ。それじゃあ美智子はなにか変つた死に方をして、君もその場に一緒に居合せたのだね。」

「むむ、一緒にいた。最後まで美智子さんと一緒にいたのだ。いつそ僕も一緒に死にたかつたのだが……。どうして僕だけが生きたのだろう。」と、彼はいよいよ昂奮した。「君はおそらく迷信家じゃああるまい。僕も迷信は断じて排斥する人間だ。その僕が迷信家に屈伏するようになったのだ。僕は今でも迷信に反対しているのだが、それでも周囲のもの

どもは、僕が屈伏したように認めているのだ。」

彼は一体なにを言っているのか、僕には想像が付かなかった。

二

「まあ、聞いてくれたまえ。」と、清はあるきながら話し出した。「君も知っているだろうが、ここらじやあ旧暦の盂蘭盆うらぼんには海へ出ないことになっている。出るとかならず災難に遭うというのだ。一体どういうわけで、昔からそんなことを言い伝えているのか知らないが、おそらく盆中は内において、漁などの殺せつしょう生を休めという意味で、誰かがそんなことを言いだしたのだろう。僕はそう思って、今まで別に気にも留めていなかった。ところで、美智子さんがこの夏ここへ帰って来てから、夜も昼も一緒に小舟に乗って、二人はたびたび海へ遊びに出ていたのだ。ねえ、君。別に珍しいことはないだろう。」

「むむ。」と、僕はうなずいた。夏休みで帰郷した美智子は、さだめて清と舟遊びでもしているだろうと、僕はかねて想像していたのであるから、この話を聞いても別に怪しみもしなかった。

「そのうちに、今月の十七日が来た。十七日は旧暦の孟蘭盆に当るので、ここらでは商売を休んでいる家も随分あつた。浜では盆踊りも流行つていた。その日は残暑の強い日だったが、日が暮れてから涼しい風がそよそよ吹いて来た。昼間から約束してあつたので、夕飯をすませてから僕は美智子さんを誘い出して、いつものとおり小舟に乗って海へ出ようとすると、僕のうちの番頭——あの禿あたまの万兵衛が変な顔をして、今夜は盆の十五日だから海へ出るのはお止しなさいと言うのだ。

孟蘭盆がなんだ、孟蘭盆の晩でも、大阪商船会社の船は出たり這入ったりしているじゃないかと、僕は腹のなかで笑いながら、そしらぬ顔で表へ出ると、万兵衛は強情に追っかけてきて、漁師の舟さえ今夜は休んでいるんだから、遊びの舟などはなおさら遠慮しろというのだ。勿論、僕がそんなことを取合う筈もない。あたまから叱りつけて出ようとする、美智子さんは女だから、万兵衛にむかって、すぐ帰って来るから安心してくれとなだめるように言い聞かせて、二人はまあ浜辺へ出たのだ。」

こう言いながら、清は路ばたに咲いている桔梗のひと枝を切り取った。どこやらでひぐらしの声がまたきこえた。

彼は薄むらさきの花をながめながら又話し出した。

「君も知っている通り、浜辺の砂地には僕の家の小舟が引揚げてある。それをおろして、僕は美智子さんと一緒に乗込んだ。今に始まったことじゃあないから、そんなことは詳しく説明するまでもあるまい。僕が櫂をとって海へ漕ぎだすと、今夜は空が晴れている。星がでる、月がでる。浪はおだやかで、風は涼しい。これまで美智子さんと幾たびか海へ出たが、こんないい晩は一度もなかった。二人は非常に愉快になって、舟舷をたたきながら声をそろえて歌った。振り返ってみると、浜辺の町の灯は低く沈んで、水にひびく盆踊りの歌ごえも微かになって、自分たちの舟がもう余程遠く来ているのに気がついたが、それでも僕は頓着なしに漕いで行つた。子供の時からここに育つて、海には馴れているからね。そのうちに美智子さんはこんなことを言い出した。『一体、盂蘭盆の晩に舟を出しては悪いなんて、誰が言いはじめたんでしょねえ。』僕はそれに答えて、前にいった通り『おそらく盂蘭盆の晩にはみんな内において、殺生の漁を休めというのでしょうか。』と言うと、美智子さんは急に沈んだように溜息をついて『そんなことならようござんすけれど、番頭さんの言うとおり今夜海へ出るの悪いんじゃないでしょうか。伝説だの、迷信だのといえますけれど、昔から悪いということは多年の経験から出ているんでしょうから……』と、こつこつ言うのだ。

ねえ、君。美智子さんは迷信家でもなければ、気の弱い人でもない、ふだんから理智的な、活潑な女性だ。それが禿あたまの番頭の口真似をするように、なんだか変なことを言い出したので、僕は少し不思議になった。今まで元氣よく歌っていた人が急に溜息をついて憂鬱になって来たのだから、どうもおかしい。」

彼はこう言いかけて、自分も低い溜息をつきながら手に持っている桔梗の花を軽く投げ捨てた。

「それからどうしたね。」と、僕は催促するように訊いた。

「それから……。僕はこう言った。『多年の経験というけれども、多年のあいだには孟蘭盆の晩に海へ出て、一度や二度は偶然に何かの災難に遭った者がなかったとも限らない。

その偶然の出来事を証拠にして、いつでもきつと有るように考えるのは間違いですよ。』

——けれども、美智子さんは承知しないで、更にこんなことを言い出したんだ。『たとい偶然にしても、その偶然の出来事に今夜も出逢わないとは限りませんまい。』——そういうばそんなものだが、なにしろ美智子さんがこんなことを言い出すのは、ふだんに似合わないことだ。しかし、いつまで議論をしても果てしがないから、僕はさからわずに舟を戻すことにした。

その時だ。櫂かいを把つかっている僕の手を美智子さんはしつかり掴つかんで『あれ、あれ……人魚が……人魚が。』と言う。なんだろうと思つて見かえると、なんにも見えない。月は皎こうこ々と明るく、海の上は一面に光っている。それでも僕の眼にはなんにも見えないのだ。

美智子さんはさつきから変なことばかり言うから、これも何かの幻覚か錯覚だろうと思つて、深くは気にも留めずにとにかくも漕こぎ戻もどすことにすると、美智子さんはなんだか物にでも憑つかれたように、発作的に気でも狂つたように、いつまでも僕の手を強く掴つかんで放さないで『あれ又……。あれ、人魚が……。』と繰返して言う。なにしろ僕の手を掴つかんでいられては、櫂かいを漕こぐことができない。舟は一つとところに漂ただよっているばかりだ。さあ、その時……。僕も見た……。僕も見た。」

清は僕の腕をつかんで強く小突くのだ。ちようど美智子が彼の手を掴つかんだように……。僕は小突かれながらも慌あわてて訊きいた。

「君も見た……。なにを見たのだ。」

「月に光っている海の上に……。」と、清はその時のさまを思い出したように息をはずませた。「海の上に……。人の顔……。人の顔が見えたのだ。浪のあいだから頭をあらわして……。」

「たしかに人の顔に見えたのか。」

「むむ。人の顔……。美智子さんのいう通りだ。」

「海亀だろう。」と、僕は言った。

海亀——いわゆる正覚坊しょうがくぼうには青と赤の二種がある。青い海亀はもっぱら小笠原島附近で捕獲されるが、日本海方面に棲息するのは赤海亀の種類だ。赤といっても赤褐色だが、時にはずいぶん巨大なのを発見することがある。清の話を聴きながら、僕はすぐに赤海亀を思い出した。彼も美智子も一種の錯覚か妄覚にかかって、浪のあいだから首を出した大きい海亀を見あやまつて、人の顔だとか人魚だとか騒いだのだろうと想像した。果して彼はうなずいた。

「むむ、海亀……。そう気がつくまでは、美智子さんばかりでなく、僕も人の顔だと思つたのだ。君だつてその場にいたら、きっと人の顔……。すなわち人魚があらわれたと思うに相違ないよ。美智子さんは人魚だ人魚だと言う。僕も一旦そう信じて、驚異の眼をみはつて見つめていると、人の顔はやがて浪に沈んだかと思うと、また浮き出した。さあ、大変……。僕の驚異はにわかに恐怖に変わったのだ。多年ここの海に出ているものでも、おそらく僕たちのような怖ろしい目に出逢つたものはあるまい。」

彼は戦慄に堪えないように身をふるわせた。

三

今までは清も僕もしずかにあるきながら話して来たのだが、話がここまで進んで来ると、彼はもう歩かれなくなつたらしい。路ばたに立ちどまって話しつづけた。

「君は海亀だろうと無雑作むぞうさにいうが、その海亀がおそろしい。僕も一時の錯覚から眼が醒めて、人魚の正体は海亀であることを発見したが、美智子さんはやはり人魚だというのだ。まあそれはそれとして、僕に異常の恐怖をあたえたのは、その海亀が浪のあいだから最初は一匹、つづいて二匹、三匹……。五匹……。十匹……。だんだんに現われて来て、僕たちの舟を取囲んでしまったのだ。海はおだやかで、波はほとんど動かない。その渺茫びようぼうたる海の上で、美智子さんと僕のふたりは海亀の群れに包囲されて、どうしていいかわからなくなつた。

一体かれらは僕たちの舟を囲んでどうするつもりかと見ていると、小さい海亀がまた続々あらわれて来て、僕たちの舟へ這いあがつて来るのだ。平生ならば、小さな海亀などは

別に問題にもならないのだが、美智子さんは無暗に怖がる、僕もなんだか不安に堪えられなくなつて、手あたり次第にその亀を引つ搦んで、海のなかへ投げこんだ。ただ投げ込むばかりでなく、それを礫つぶてにして大きい奴にたたきつけて、一方の血路をひらこうと考へたのだ。それは相当に成功したらしいが、何をいうにも敵は大勢だ。小さい舟の右から左から、艦ともからも舳みよしからも、大小の海亀がぞろぞろ這いこんで来る。かれらは僕たちを啖くらうつもりだろうか。ここのらの海亀は蝦や蟹を啖うが、人間を啖つたという話をきかない。しかしこんなにも多数の海亀に襲われると、僕たちも危険を感じずにはいられなくなった。僕もしまいには闘い疲れてしまった。美智子さんはもう死んだようになっていた。かれらはほとんど無数というほどに増加して、舟の周囲に一面の甲羅をならべたのが月の光りにかがやいて見える……。君がこういう奇異に遭遇したらどうするか。僕は疲労と恐怖で身動きも出来なくなつた。」

成程これは困つたに相違ないと、僕も同情した。同情を通り越して、僕もなんだが体の血が冷たくなつたように感じられて来た。おそらく顔の色も幾分か変つたかも知れない。「その場合、君にしても權を取つて防ぐくらいの知恵しか出ないだろう。」と、清はあざわらうように言つた。「そんな常識的な防禦法で、この怪物……人魚以上の怪物が撃退さ

れると思うか。駄目だ、駄目だ。精神的にも肉体的にも戦闘能力を全然奪われてしまつて、僕は敗軍の兵卒のようにただ茫然としているあいだに、無数の敵は四方から僕の舟に乗込んで来た。どういふふうに登よじのぼつて来たのか、僕もよく知らないが、ともかくも続々乗込んで来たのだ。こうなると、誰にでも考えられることは海亀の重量だ。大きい海亀は何貫目の重量があるか、君も知っているだろう。それが無数に乗込んで来て、しかも一匹の甲羅の上に他の一匹が乗る、又その上に一匹が乗るといふ始末で、かさなりあつて乗るのだから堪たまらない。大石を積んだ小舟とおなじように、僕たちの舟はだんだんに沈んで行くのほかはない。無益とは知りながら、僕は血の出るような声を振りしぼつて救いを呼びつづけたが、なにぶんにも岸は遠い。僕が必死の叫び声も、いたずらに水にひびいて消えてゆくばかりだ。これが平生の夜ならば、沖に相当の漁船も出ているのだが、いかんせん今夜は例の迷信で、広い海に一艘の舟も見えない。浜の者どもは盆踊りで夢中になっているらしい。僕たちが必死に苦しみもがいているのを、黙つて眺めているのは今夜の月と星ばかりだ。僕たちの無抵抗をあざけるように、敵はいよいよ乗込んで来る。舟は重くなる。舟舷ふなべりから潮水がだんだんに流れ込んで来る。最後の運命はもう判り切つているので、僕は観念の眼をとじて美智子さんを両手にしっかりと抱いた。子供の時からこの海岸に育つた

僕だ。これが僕一個であつたらば、たとい岸が遠いにもしろ、この場合、運命を賭して泳ぐということもあるが、美智子さんを捨ててゆくことはできない。二人が抱き合ったままで、舟と共に沈もうと決心して……。これも一種の心中だと思つて……。それからさきは夢うつつで……。」

「そうすると、結局は舟が沈んで……。君だけが助かつて、妹は死んだというわけだね。」

「残念ながら事實はそうだ。」と、清は苦しそうな息をついた。「おそろしい悪夢からさめた時には、僕たちふたりは浜辺に引揚げられていた。あとで聞くと、僕たちの歸りの遅いのを心配して、番頭の万兵衛がまず騒ぎだして、搜索の舟を出してくれたので、海のなかに浮きつ沈みつ漂っている僕たちが救われたというわけだ。なんととっても僕は水ごころがあるから、たくさんの水を飲まなかつたので容易に恢復したが、美智子さんはだめだった。いろいろ手を尽くしたが、どうしても息が出ないのだ。こんなことになるなら、僕もいつそ恢復しない方がましだったのだ。なまじい助けられたのが残念でならない。僕たちの小舟はあくる朝、遠い沖で発見されたが、海亀はどうしてしまつたか一匹も見えなかつたそうだ。」

「死んだものは、まあ仕方がないとして、君のからだはその後どうなのだ。もう出歩いて

もいいのか。」と、僕は慰めるように訊いた。

「僕はその翌日寝ただけで、もう心配するようなことはない。美智子さんの葬式にもぜひ参列したいと思つたのだが、みんなに止められて扱よんどころなく見合せたので、きょうは思い切つて墓参りに出て来たのだ。幾度いつても同じことだが、僕は生きたのが幸か不幸かわからない。僕は昔からの迷信を裏書きするために、美智子さんを犠牲にしたようなものだ。」

彼の蒼白い頬には涙がながれていた。

「僕も迷信者になりたくない。それは美智子の言つた通り、君たちが不幸にして偶然の出来事に出逢つたのだ。」と、僕はふたたび慰めるように言つた。

この話はこれぎりだ。孟蘭盆の晩に舟を出すとか出さないとかいうのは、もちろん迷信に相違ないが、海亀の群れがなぜその舟を沈めに来たのか、それは判らない。かれらは時々水を出て甲をほす習慣があるから、そんなつもりで舟へ這いあがつたのかとも思われるが、正しょうがくぼう覚坊ぼうに舟を沈められたというような話はかつて聞いたことがないと、土地の故老が言つていた。更にかんがえると、普通の亀ならば格別、海亀が船中に這い込んだと

いうのは僕の腑に落ちかねるが、なにぶん現場を目撃したのでないから、ともかくも本人の直話を信用するのほかはなかった。

青空文庫情報

底本：「異妖の怪談集 岡本綺堂伝奇小説集 其ノ二」原書房

1999（平成11）年7月2日第1刷

初出：「日の出」

1934（昭和9）年8月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：網迫、土屋隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海亀

岡本綺堂

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>